

## 学ぶ側の視点で

### —私流・自己点検—

山 田 真理子

#### はじめに

教育とは、本来、「学び」が主体であり、「学ぶ側が学んだもの」によって教育効果が評価されるものであろう。しかし、「学生が聴いていない」「学生の学ぶ意欲がない」「来ている学生の質が…」など、様々な言い訳の下で、特に大学においては、「私は必要なことは教えている。教えたなら学ぶのが当然で、覚えないのは学生の怠慢」という論で切り捨てられてきたように感じる。今、小・中・高校の教育現場では、子ども達に学習への意欲を持たせ、学ぼうとする動機づけを持たせ、授業を楽しくするために、様々な工夫がなされている。小・中・高校では生徒のせいばかりにしては、教師としての意識が問われる所以である。大学教官も、教育者としての立場を有しているものであるならば、学生の器に合わせた工夫があるかどうかが問われてよいのではなかろうか。

私がかつてカウンセラーとしての訓練を受けている過程で学んだものは、相手の役に立たなければ、どんなにカウンセラーが正しく良いことを言っても何の価値もないという事実であった。そのため、今も、できるだけ様々な手段を導入し、学生と共に歩む授業を目指したいと思っている。

本稿では、学生にとってもっともいやな「試験」を、学生にとっての学びの場とする工夫を報告し、また、学んで欲しいことを身に付けるために、楽しく集中して燃える授業作りを提案する。その過程で、実は、今迄していた私自身の講義の点検もされたことを報告しようと思う。また、本稿での工夫は、多く「仮説実験授業」の取組を記した様々な著書によっている。したがって、これらの授業工夫の短大生での追試・検討の形を取っているといえる。

今回は、「試験問題を学生が作る」について報告しよう。

## 試験問題を学生が作る

このヒントになったのは、小原茂巳著「授業を楽しむ子ども達」である。「仮説実験授業」という教育方法を推進する「楽しい授業」の常連執筆者として、小原は中学校の理科教師として数々の授業の工夫を生みだしていた。その中で、「テストは楽しいはず…」という仮説実験授業の提唱者・板倉聖宣のことばに奮起して生徒と「ヤマかけ委員会」を結成、テストを充分に楽しんてしまうのである。

私は、「楽しい授業」で紹介された授業を実践してみたりもしているが、短大生では「担当時間数が通常、1週に1時間しかない」「学生数が小・中学校に比べてはるかに多い」「かなり専門的な理解を必要とし、微妙なニュアンスが問われる」などの理由により、それなりの工夫や変更が必要である場合が多い。

今回報告する「テスト問題を自分で作る」作業は、まず、一人一人が10問づつの問題を作ることから始まった。

### 1、自分で作る テスト問題 (B6版用紙配布)

- (1) 各自教官になったつもりで、指定期間に学んだ内容からテスト問題を作る。
- (2) テスト問題は、○×式・記述式・虫喰い式・記号記入式など、どんな形式でも良いが、10問作る。
- (3) 正答も書いておく。

これはB5用紙の左半分に印刷され、右半分は10問を書き込むようになっている。まず学生に「試験問題を学生自身が作ること」を話して範囲を指定し、30分～40分与えて問題を作らせる。学生は、ウキウキとノートを見返しながら問題作りを始めた。ただノートを見直すよりもすっとよく中身を点検しており、感想からもそれは伺われた。

- ・問題を作ろうとすると、分かっている以上に理解していないと、答えられる様な問題が作れないので、よりいっそう勉強ができると思います。
- ・自分で試験問題を作ることは、とても勉強になるのでよいと思う。
- ・ノートを、普通に勉強するよりなんべんも読み直すことで、より深く理

解できた。

- ・自分で作ると、何を問われているかが分かりやすい。
- ・簡単な問題ばかり作ろうと思ったけど、いざ作ってみると授業内容や先生の話も入ってなかなか鋭い問題になったようだ。
- ・自分で問題を考えると、「ここは問題に出しそうだ」とか「ここは重要」と分かる。
- ・先生が作ると、先生のパターンが分かれば勉強が簡単だが、学生が作るといろいろな問題が出るので困る。
- ・先生が作ると何を出すか見当がつかないけど、自分達で考えると同じような考え方で、これは大事とか分かるので、良い方法だと思います。
- ・問題作りは楽しかったが、結構難しくて、先生の苦労も分かった。
- ・私たちは今まで暗記するものばかりで必死になっていました。しかし、テストとはそんなものではないとハッとした。
- ・勉強しやすいし、やる気が出るし楽しいのでよいと思う。
- ・問題を作ると、それまでの授業が自分の頭の中に整理できるのでいい。
- ・先生が作ると、先生は分かっているから、これは簡単と思って出すのが難しかったりするが、学生が作ると、こう出せばとける！というような問題を作るからよいと思う。
- ・今まで受け身であったのに、急にこういうことをするのは無理があった。
- ・先生になった感じがして面白かったが、一つ間違えたら難しい問題を作りそう。
- ・自分達で問題を作ることにより、自分で、これは大事だなとかこの答えは本当にこれでよいのかとか、今まで考えなかったことまで考え、理解することができるので良いと思う。
- ・ノートをちゃんと取っておかないと、問題が作れない。今度からちゃんと取ろう。
- ・問題があらかじめ分かるし、友達と一緒に問題を作りながら勉強できるのでよいと思いました。
- ・先生が何回も言った所、詳しく言った所、黒板に書いたところなど重要なものから問題をつくろうとした。

以上のように、試験問題を自分で考えることは、学生に支持された。し

かし個人個人で作った問題は、そのまま使うには、あまりに思い込みによる出題が多く、いざ、解答してみると、何を聽かれているのかわからなかったり、答えがいくつもあるような問い合わせたりする。例えば、「3歳では（ ）が起こる。」「子どもの意欲を引き出すには（ ）が大切である。」などのように、答えが特定しにくいものや、「人生の基盤は何か」というような漠然とし過ぎた設問などが見られた。そこで、小グループで、問題の検討をし、より適切な試験問題を作り合うのである。

## 2、小グループでテスト作成

6～7人のグループになり、各自の作った問題を検討し、一枚のテスト用紙を完成させる。これはいわば、グループ学習の形態で、自分ではよいと思っていた問題が、人に見てもらうと答えにくく問い合わせたり、それを改めて学び直したりする。それに加えて、「人が作った問題を、私のノートにはこんな事書いてないというのもあって困った」など、自分の理解と人の理解に食い違いがあったりして、お互いに話し合うことによって理解を深めたりする。学生は、この小グループでの問題作りを「たのしかった」「和気あいあいの中で勉強ができた」と語っている学生が多く、一緒に勉強する楽しさを感じていた。

- みんなの考え方や、意見が聞けてよかったです。
- みんなが選んでいるところは、みんな重要と思っているんだなと分かってよかったです。
- 人のノートの取り方も分かって勉強になった。
- 自分が間違えて覚えているところが、友達にチェックされてよかったです。
- それぞれが自分が大事と思うところがあって、それが集まって初めて、「こんなに大事なポイントがあったんだな」という発見につながる。
- ワイワイ楽しみながら作ってしまった。
- 人によって問題の作り方が違うので、こんな問い合わせもあるんだなあと別の角度から勉強できて楽しく覚えられると思いました。
- 学生が作ると簡単かなと思っていたけど、むしろ、細かいことを聞いていたりして難しかった。
- 友達と交換してやってみたりして、楽しかった。

- ・それを作ってきた問題をまとめて作っているとき、とても楽しくできたので、面白い方法だと思いました。これからもこれでやってください。
- ・たくさんの人のを集めるに、いろいろ種類の違った出し方になるのでいいと思います。
- ・学生だけでは、大切なところが抜けているのではないかと心配になってくる。
- ・友達の正解が、本当に正解なのか考えるのが難しかった。
- ・自分で考えた問題が、友達は全然大事と思っていなくて、ちっともポイントをつかんでないことが分かった。これからも、大事だと思うことを話し合い、自分達で問題を作るこのやり方でやって欲しい。
- ・問題作りのうまい人は、よく分かっている人だと思う。自分はまだまだ作り方が下手だと分かった。

心配したほど「任せで考えようとしない学生」はいなかつたし、自分の考えた問題を一つは生かそうとして、結構グループの中で攻防戦もあったようである。自分の考えた問題が最後まで残るかどうかには、ずいぶん関心が高かったようで、最終的に、自分の考えたものが出ていれば、当然その問題は正解できるのであるから、「自分の考えた問題があってうれしかった」と感想もある。

### 3、テスト実施

本番の試験問題は、小グループから出された約20枚の試験問題から、頻度の高いものが選ばれた。虫喰い問題になる文章については、接続詞くらいは私が付け足したが、ほとんど、学生が作ったものを用いればよく、教官としては、試験問題作りの手間が省け、学生が本当に私が伝えたかったような脈絡で聞いていたかどうかを心配する必要がなく、大層楽だった。

テスト前、学生達は、自分のノートを見直して必死に取り組んでいる。教官が問題を出す場合、どこから出されるか分からないと、学生達は、もう匙を投げてしまってわいわいと騒いでいることも少なくない。しかし、この時は静かであった。友達の考えた問題や自分の問題を見直し、復習している。この時の気持ちの中には、「仲間が考えた問題が分からないなんて、恥だ」という事もあったようであり、いずれにしても、学生の意欲は

高かった。

- ・いつもよりわくわくした。
- ・このような小テストを度々してもらうと、よく覚えていい。
- ・学生も、結構やるじゃない！というような、重点を押された問題だった。
- ・思っていたより難しかった。
- ・重要と思うところは、みんな同じなんだなと思ったが、とにかく勉強不足でした。
- ・なかなか、細かい問題もあって、難しかったです。
- ・学生が作っても、先生が作っても、結果は余り変わらなかったと思う。
- ・学生が考えた問題が分からないと、くやしかった。
- ・自分達のグループが考えたのは2つだけだったので残念です。

試験時間は約30分。書くスピードは、問題への戸惑いや、問われていることが分からないという事が少ないせいか、いつもより早かった。また、極端に勉強不足という学生もなく、一様に、書き込んでいる印象だった。問題作りの中で、何度も復習せざるを得なかつたことが、確実に生きていた。

#### 4、答えあわせ

まるで小学生と言われるかも知れないが、テスト終了後、すぐに答えあわせをした。隣の人と答案を交換し、私の言う正解（学生が記入していた正解）に従って採点を進めた。学生は、疑問点はすぐに質問ができ、また、間違えた問題についても、その度に見直し、覚え直すことができた。なぜ、教官のみが採点するのが通常の事になったのだろうか。確かに、自分の得点を人に知られることへの抵抗やごまかすことの防止の意味はあろうが、大学の場合、自由に座ると、お互いに仲のよい同士が答案を交換することになり、前者の抵抗は少ない。また、メリットの方がデメリットをはるかに超え、こうなると、教官のみが結果を先に知ることができることで生まれされるものは、学生の不安感と、教官の優越感のみではなかろうかとさえ思えてしまう。とにかく、学生は熱心に、採点しながらも自分の知識を確認していった。

試験問題の難易度は通常のものと変わらなかったと思うが、結果は、通常の試験に比べてよかったです（125名、平均74.8点、最高95点、最低43点）が、点数だけでなく、学生の得たものは大きかったというのが実感である。

## 考 察 —私流・自己点検—

教官にとって、自己点検とは一体なんだろうか。大学の自己点検の項目のうち「教員による教育方法の自己点検、向上のための努力を推進するための措置」や「教育過程の有効性・妥当性の恒常的な点検・評価」などは、直接学生に関わることであり、教育機関である本来の目的に密接に関係することでありながら、実情としては、教員の自己点検・自己申告に頼らざるをえない場合が多い。しかし、森脇（産能短期大学）は、ここに「学生による授業評価」を全学的に導入し、アンケートによる結果を分析している。その調査は、実に専任教員の98%、非常勤教員67%が実施しており、教員の理解と同意、協力と相互の信頼感が伺われる。その報告の中に、演習科目の評価が高く、講義科目の評価が低い事を「やはり」と当然のごとく書かれているが、講義系の担当者としては、この調査を意欲的な挑戦として強く支持すると同時に、結果は易々諾々とは受け入れたくない気もする。

さて、本稿は、教官主体の講義系授業をどこまで学生の手に戻せるかという実験でもあった。本学科のような専門資格を持った社会人教育が主眼におかれた場合、身に付く・役に立つという側面が学生の意欲に大きく関与することはいうまでもない。だとしたら、そこにいかに主体的に関わらせる機会を作るかが、教官の裁量であろう。「学生による試験問題作り」を試みてみると、なぜ今まで「試験問題は教官が作るもの」と決め込んでいたのかが不思議に思えて来る。学生に作らせたほうが、明かに学生にとってのメリットが大きいのである。しかし、実際にすべての担当科目にこの方法を導入しようとした時、（私の場合は、特に、教科書を読み上げるタイプの授業ではないので）どれほど適切な脈絡と強調点を持って中身を伝えられたかが問われているという怖さも実感した。学生の作った問題を見ると、自分の講義の中のあいまいさや強調点のズレ、まとめの不十分さなどが見えてきたのである。これをやってみてつくづく思うのであるが、試

験の結果が悪く、落第者が多い場合、半分は教官の責任である。

また、特に、保育者（福祉施設職員）という職業を目指す学生にとって、この「どこまで学生の手に戻せるか」という試みは、実に、彼らが指導的立場に立ったとき、「何もかも指導者側が準備して、子どもは受け身に与えられたことをするだけ」といった関係にならないで欲しいという願いも込められている。「何をしようか、そのためには何がいるか、それを手に入れるにはどうしたらいいか、他に準備するものは何か…」そんな作業のひとつひとつを子どもと共に生きる保育者（職員）であってほしい。試験を作っているときの学生の顔や「テストだビンゴ！」<sup>\*1</sup> や「100人に聞きました」<sup>\*2</sup> の授業中の楽しそうな集中を見ると、この生き生きした顔が、そのまま彼らの仕事に生かされて欲しいと思うのである。

楽しく学んだ経験がなければ、楽しく学べる保育（教育）を作り出せる力は養われないと、私は思うのである。

（おわり）

（注）

\*1・楽しんでテスト「テストだビンゴ！」

- 1)  $5 \times 5$  のマスを書いた紙をわたす。
- 2) マスのなかに、指定された範囲から、大切と思う用語を書く。
- 3) 全員がかけたら、教官が用語を読み上げる。自分の記入した中にその用語があったら、○をつける。
- 4) ○がたて・横・斜めどれでも5つ並んだら、「ビンゴ！」と叫んで手をあげる。
- 5) 教官は重要な用語から言ってゆく。
- 6) 初めに、「ビンゴ」になった学生を100点にし、その後、1用語ごとに1点づつ減じていって「ビンゴ」になった学生の得点として行く。  
60点の所で終了。
- 7) 「最多列賞」「一列もできなかった賞」を決める。
- 8) 感想を書いて提出。

学生の感想の多くは、「こんなに楽しくて勉強できるなら、またしたい」「思いがけず、もえてしまった！」「大切な用語をちゃんと選び出せていなくて、くやしかった」「リーチが8つもあって、一つもビンゴに

ならなかった。並べ方まで考えていなかったので、今度は頑張る」など、生き生きとしたものであった。教官が一つの用語をいう度に、悲喜こもごもの歓声があがっていた。

#### \*<sup>2</sup>・覚えるための工夫「100人に聞きました」

テレビ番組であった「クイズ100人に聞きました」の応用である。

- 1) 10問程度の質問に、学生が自分の考えで答える。(この質問は、できれば幾通りかの答えが予想されるものがよく、一人は一つしか答えられない事で、ある答えをする人数が次の段階で重要になる) これも小テストのかわりになる。
- 2) 教官は、1)を集計し、問い合わせに対して出されたいいくつかの答えの頻度を控えておく。(答えに順位をつけておくのもいい)
- 3) 学生に、1)の問題を再度出し、(この時、数人のグループを組み、グループで相談して答えさせる) 答えさせる。
- 4) この時の答えが、1)で答えられた時に何人が答えているかを見るわけで、この人数が得点になる。
- 5) 各グループで、全問題に対して答えを予想する中で、得点を競う。この過程で、学生は、クイズのスリルを楽しみながら、自分が大事と思うことと他の人が重要と思うものの違いや一致に気づき、「あ、そうか!」「そういう答えもあるね!」そんな声が飛び交って、その問い合わせに関する答えを確認していく。

#### 〈参考文献〉

##### 1、「学生による授業評価」 森脇道子

私立大学の教育・研究充実に関する研究会報告書

##### 2、「授業を楽しむ子ども達」 小原茂巳 仮説社

##### 3、「楽しい教師入門」 小原茂巳 仮説社

##### 4、「楽しい授業プラン・国語」 楽しい授業編集委員会 仮説社

したがって、これらの授業工夫の短大生での追試・検討の形を取っているといえる。

今回は、「試験問題を学生が作る」について報告しよう。